

《紅の館》



林家舞楽（国指定重要無形民俗文化財）ジオラマ

林家舞楽は、貞観2年（860）山寺の立石寺開創と同時に伝えられた舞楽で、古いおもかげをとどめている。

『陵王』 印度の戒日王の作「陵王の喜び」という古代歌劇の一節をとった沙羅龍王の舞。装束の赤色は紅染めである。



こがねいぶね
小鵜飼舟（模型）

最上川の急流に適するように改良され、紅花や米を酒田まで運んだ川舟である。小鵜飼舟は元禄以降阿武隈川から移入された舟で、3人乗りで、軽いうえ、へさきが流線形をしてスピードもあり、最上川舟運の主流を占めるようになった。



北前船（模型）

江戸中期から明治の始めにかけて日本海海運の主力となって活躍した廻船を北前船と称した。順風時以外は櫂で漕がなければならず多数の船子が必要とした。



船箆筒

船の動揺にもほかの器物との衝突にも耐えられるように、角はもちろん、抽斗^{ひきだ}しの引き手なども、武骨なまでに金具が用いられている。材は外が樺で内に桐を使用している。



古文書

谷地の紅花商人は近郷から紅花を買い集め、それを大石田から川舟に積んで、酒田経由で京都に送った。堀米家にも多くの紅花に関する古文書が残されている。



紅花燈籠

天保7年（1836）大阪市の住吉大社に奉納されたもので通称「紅花燈籠」と呼ばれている。高さ6.7メートルの花崗岩製の壮大な燈籠である。



長明燈

文久2年（1862）3月、山形の佐藤屋利兵衛ほか22人の紅花問屋（永寿講）によって住吉大社に奉納された。高さ6.9メートルの豪壮な燈籠である。

お雛様

京都からの帰り荷にはいろいろなものが積まれてきた。お雛様もその一つで、町内にはたくさんの雛が大切に保存され、毎年、月遅れの4月2日と3日を中心に自宅公開されている。江戸時代の人形の衣装にも紅花染が使われている。



享保雛（江戸中期）

面長の顔、きれ長の目を持ち、能面のような神秘的な表情をしている。たいへん優雅で、金襴の豪華な衣装をつけている。



次郎左衛門雛（江戸中期）

京都の人形師の雛屋次郎左衛門によって考案された雛で、丸顔に引目鉤鼻、おちょぼ口が特徴である。

男雛と女雛の右と左

我が国の故実では、なんでも御所を中心として考えられてきました。『天子南面』ということわざどおりです。ゆえに京都では、昔と同じに、向かって右が男雛、左が女雛です。この左右がかわったのは、昭和3年、昭和天皇の即位式を参考にして、東京の雛人形業界で、内裏雛の左右を決めたといわれます。





紅花屏風（複製）

山形県六田村（東根市）に生まれ、江戸に出て中橋狩野永真に学んだ画家青山永耕（1814～79）の作品で、最上紅花の生産から取引・運送までの経過が生き生きと描かれている。

（原本 山寺芭蕉記念館所蔵）



